自然と観光の共生をめざした生涯学習
—沖縄県国頭村におけるツーリズムによる村おこしの実践から—

夏秋 英房

1. はじめに

地方分権の時代においては，特徴ある魅力的な地域づくりが欠かせない。地域の特性を活かした市町村の自主的・主体的な地域づくりが活発に展開される前提には，地域住民が地域の特色や魅力に気づき，地域を学習資源として見直し活用を図る事が必要となる。そのためには，(1)地域学習資源活用の現状を診断する，(2)地域課題・現代的課題の発見と課題解決学習へとつなげることが大切である。[1)]

しかし，そのような手順を踏んだ学習活動を具体的に展開して継続的な学習の仕組みを作り上げることは容易なことではない。本報告では，個々人の生涯学習の実践が地域の活性化につながる展望を抱いて実践に取り組んでいる事例を取り上げて，その特質を検討したい。対象は地元住民が自然と共生できる村おこしに取り組んでいる沖縄県国頭村(くにがみそん)であり，当面入手可能な資料と2003年11月に実施した面接聞き取り調査に基づいて，検討を進める。

この事例の特徴は，(1)国の事業としてそれを受託したコンサルによって学習活動が進められていること，(2)同時に村住民のなかから自発的に村の現状と将来を考える学習活動が起こっていること，(3)最終的には住民の自主的な学習活動から具体的な「ツーリズム」，「産品開発」，「人材育成」の事業展開へと進み，まちづくりへとつながっていること，(4)学校教育や野生生物保護センターとの連携を通じて青少年の育成とも連携していることである。

エコツーリズムといえば，西表島の先行事例が有名であり，その経済効果についても研究がなされている[2)]が，西表島はまた新たなリゾート施設開発問題に現在揺れてもいる。

島嶼である沖縄県にとって観光産業は必須のものでありながら，自然収奪型で本土資本によって利潤を吸い上げられる従来の大衆観光(マスツーリズム)のあり方は厳しく問われなければならない現状となった。これに対して提唱されているエコツーリズムも多義的で明確な定義はなく，それを謳った業者間でも一本化した見解があるわけではない(後掲資料1，2参照)[3)]。国内では日本エコツーリズム協会が2003年2月に内閣府認証の特定非営利活動(NPO)法人として公式に登録された。また，沖縄では1998年にエコツーリズム推進協議会の設立総会が開かれて以降，2002年11月に「国連・国際エコツーリズム年　エコツーリズム国際大会・沖縄」が「エコツーリズムによる地域の自立的発展と多様性の維持」をテーマに開催されるに至っている。

そのようななかで，国頭村は独自のツーリズムの理念に基づいた態勢づくりに取り組んでいるのである。

聞き取り調査は，2003年11月28日に国頭村教育委員会社会教育課，国頭村ツーリズム協会，環境省やんばる野生生物保護センターにおいて行った。

(資料1)日本エコツーリズム協会が考える「エコツーリズム」の定義

＜前文＞

日本はもとより国際的にもエコツーリズムに関する確立した定義がない現状に鑑み，当日本エコツーリズム協会は次のように考え，その健全な普及と推進を図ります。

＜本文＞

エコツーリズムとは，

①自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること

②観光によってそれらの資源が損なわれることがないよう，適切な管理に基づく保護・保全をはかること

③地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現することをねらいとする，資源の保護＋観光業の成立＋地域振興の融合をめざす観光の考え方である。それにより，旅行者に魅力的な地域資源とのふれあいの機会が永続的に提供され，地域の暮らしが安定し，資源が守られていくことを目的とする。

＊付記

＜上記エコツーリズムの概念を定義付けするにあたっての考え方＞

①エコツアーとは，こういったエコツーリズムの考え方に基づいて実践されるツアーの一形態である。

②エコツーリズムの健全な推進を図るためには旅行者，地域住民，観光業者，研究者，行政の5つの立場の人々の協力がバランス良く保たれることが不可欠である。

③環境の保全を図りながら観光資源としての魅力を享受し，地域への関心を深め理解を高めてもらう手段としてのプログラムがつくられるべきであり，地域・自然・文化と旅行者の仲介者(インタープリテーションの能力を持ったガイド)が存在することが望ましい。

(資料2)西表島エコーツーリズム協会が考えるエコツーリズムとは

訪問先の自然環境を破壊することなく，その土地特有の自然・生活文化などの資源を持続させていくような旅行の概念です。“エコロジカルなツーリズム”を意味する言葉として，20年ほど前から欧米の若者たちのあいだで使われるようになりました。今では自然保護と観光，そして地域への経済還元を同時に成立させる新しい旅として，世界的に注目されています。

エコツーリズムは，豊かで，荒らされていない自然を持つ地域をフィールドに行われるもので，その地を訪れる旅行者が，自然や文化についての正しく深い知識を得，その地域ならではの自然とのふれあいを体験できるような旅行を指します。また，エコツーリズムを通じて，旅行者や彼らを受け入れる地域の人々の間に，自然や文化の保護の意識を育むことも，その重要な目的の一つです。そのような意識が人々に根づくことではじめて土地の自然環境や文化をかけがえのないものとして守り，活用し，維持していくことができるのではないでしょうか。

西表島におけるエコツーリズム

西表島は「東洋のガラパゴス」と称されるほど豊かで多様な自然に恵まれた島です。その海も空も山も，島人たちによって長い間大切にされてきました。西表島こそ，自然と人の関わりについて深く知るエコツーリズムにふさわしい場所の一つではないでしょうか。謙虚に自然や人に接することで，旅する人にあまりある贈り物を与えてくれる島。それが西表島なのです。

2. 国頭村の概要

2—1. 位置と自然[4)]

国頭村(くにがみそん)は沖縄県最北端，北緯26度，東経128度付近に位置し，東は太平洋，西が東シナ海に面し，沖縄県内で4番目に広い，194.80㎢の面積を有している。

海岸線を除く村の大部分がスダジイを極相木とする森林であり，村の中央部は本島最大の山林原野を有しイタジイ等の原生林が覆い茂り，その森には，国指定天然記念物のノグチゲラやヤンバルクイナ，ヤンバルテナガコガネなど有名な貴重種を含め，さまざまな希少な生き物たちが多種多様に生息することから，東洋のガラパゴスとも称されている。

村の中央脊梁部を沖縄県最高峰の与那覇岳(503m)，伊湯岳(446m)，西銘岳(420m)の山が連なり，豊富な水は3つのダムに溜め込まれて都市部への水の供給源となっている。その山岳が連なり海岸近くまで丘陵地となっている。

そのため河川勾配が急で，かつ流路延長が短い河川が多く，その流域にわずかな平坦地がある。南側は伊湯岳の分水嶺を起点として，東に流れる新川川，西に流れる屋嘉北川をもって，東村，大宜味村と隣接している。

2—2. 沿革と文化

村勢要覧によると，尚貞5年(1673年)に田港間切が新設され，9年後に大宜味間切に解消されて，国頭間切と大宜味間切が分離して，国頭の番所が浜に移った。

1732年は番所が奥間へ移転した。明治41年(1908年)の島嶼町村制施行により，村を字と改称し，15ヵ字をもって国頭村が成立した。15ヵ字とは，浜，比地，辺土名，宇良，伊地，与那，謝敷，佐手，辺野喜，宇嘉，辺戸，奥，楚洲，安田，安波である。その後，大正3年(1914年)に奥間から役場を辺土名に移転し，半地，鏡地，桃原，宜名真の新字が誕生した。

第二次世界大戦中，昭和20年の米軍上陸以来，中・南部の人々が多数山中に避難した。

戦後昭和20年9月1日に国頭村，大宜味村，東村の三村が統合して辺土名市が誕生したが，翌21年には三村に分離し，現在の20ヵ字になった。

17世紀頃から発達していったとされる国頭村の各集落では，縄文風の漁労採集の生活に農耕が絡み合わさった生活が営まれていたようである。そのような自然に大きく依存する生活を背景に執り行われるようになった祭祀は，現在安田区に残されているシヌグや比地区ならびに与那区などに伝わるウンジャミ(海神祭)，奥のビーンクイクイと呼ばれ，古くからの慣わしを維持したまま今なお継承されている。

2—3. 人口と産業構成[5)]

国勢調査によると昭和25年には12000人を数えた人口は，その後減少傾向にあり，平成12年には5825人，2104世帯となり，平成13年3月現在の村の統計では人口は5913人，2279世帯であり，1世帯当たり2.6人とされている。人口構成は，15歳未満が18.3%，15歳から64歳が55.9%，65歳以上が25.7%であり，そのうち65歳から74歳が12.4%，75歳以上が13.3%である。就業者数は平成7年国勢調査では2675人である。

小学校9校の児童総数は平成13年度で429人であり7校が複式学級の編成をとっている。また，中学校7校の生徒総数は280人で，うち4校は複式学級の編成をとっている。

3. 国頭村ツーリズム協会設立の経緯と活動

3—1. 国頭村ツーリズム協会の趣旨

国頭村ツーリズム協会は国頭村にふさわしいツーリズムの確立を目指し，自然・文化・歴史・人との触れあい及び保全を行い観光振興に資するとともに地域経済への貢献を通して地域の活性化と地域資源の持続可能な利活用のあり方を図ることを目的(規約第2条)として，平成14年4月に国頭村に住む地域住民が主体となって設立された任意団体である。本協会事務局は，国頭村観光物産センター(道の駅「ゆいゆい国頭」)に設置されている。

3—2. 沿革と組織

ここでは，2つの資料から国頭村ツーリズム協会の設立に至る経緯をまとめてみたい。1つは国頭村ツーリズム協会における聞き取り調査および入手資料からであり，もう1つは玉沖仁美「沖縄観光とエコツーリズム」第139回沖縄問題研究会口頭発表記録[6)]からである。

まず，客観的事実から押さえると，国頭村ツーリズム協会の発足に至るまでには，

2000年　「やんばる国頭塾」(久高将和氏主宰)にて，国頭村に住むメンバー(建設業，林業，役場，農協職員などに従事)による，やんばるの自然や文化，歴史を包括的に学ぶ勉強会が始まる。

2001年　地域住民による自然に負荷のない持続可能なツーリズムの考えを発展させることを目的に，国頭村ツーリズム協会設立準備会が設立した。インタープリターや地域資源の正しい活用の仕方を理解できる人材を育てる講座(半年間)を地元の人々を対象に開講。

2002年　地域資源を活かした独自の「国頭ツーリズム」の確立を目指し，任意団体として国頭村ツーリズム協会が発足した。次の世代に引き継げる持続可能なツーリズムの実現に向けて活動を開始した。

という経緯があった。

構成員は，会長(1名)，副会長(1名)，理事(5名)，監査(2名)，顧問(1名)であり，このうち3名は「やんばる国頭塾」の2000年卒業生である。また，会員は個人会員37名，団体会員2団体である。(平成15年6月現在)

顧問を務める村内の写真家の久高将和氏は自然保護に関しても県内でも有名な人であり，国頭村ツーリズム協会のキーパーソンである。もともと，久高氏やその知人の大島順子氏が開いている「やんばる国頭塾」に人材育成という形で入った人たちが，こんなものができたらいいだろうということで2001年に準備委員会を，2002年に協会を設立

したのであり，地元住民の学習活動から立ち上がった組織である。

また，協会の構成員の業種はさまざまであり，会長が土建業者，副会長は商工会の事務局長，理事には農協職員やリゾートホテルの支配人，森林組合の人，ダイビング会社，地域ガイドの人などで構成されている。また，大島順子氏は人材育成講座ファシリテーターとして，村内に1年間居を構え，人材育成講座を主導すると共にプログラム作りや，どのような体験学習が国頭村内でできるかを検討し，主に今年の人材育成講座と，年明けにステップアップ講座のさらに進んだカリキュラムを国頭，大宜味，東の三村合同で実施することへ向けて奔走している。

ところで，その一方で，国頭村ツーリズム協会設立などの一連の動きに関わっていた，(株)リクルート沖縄支局長の玉沖仁美氏は講演で次の趣旨の内容を述べている。

昨年度は，旧運輸省観光部の事業で，国頭村のツーリズムの仕事をした。この事業は，旧国土庁の地域活性化推進費で行われ，事務局は，旧運輸省観光部観光地域振興課である。それを日本観光協会が事業主体となり，リクルートが受託させてもらった。事業名は，「中山間地域における観光交流促進のための自然活用方策に関する調査」という。

国頭村で事業をしていたら，ある方が「うちは『国頭ツーリズム』でやっていく」と言った。事業の中でワークショップを取り入れたが，その座長の久高将和氏は私財を投じて，ツーリズムの私塾のようなものを国頭村に作っておられる。私たちの事業の中で座長を務めていただいたので，謝金をお支払いしたが，その謝金すら私塾の費用に投じられ，現地で20名弱くらいの人数で勉強しておられる。

琉球新報(2000年12月24日)で取り上げられた記事の冒頭で，この久高将和氏が「エコツーリズムではなく，国頭ツーリズムを作りたい。国頭村内にある地域資源も人も，国頭にあるものを使って行うツーリズムを国頭ツーリズムということで，受け入れて拡げていきたい」と話しておられる。この国頭村の話は，6カ月間で12回も新聞に取り上げられた。

このように，一見，住民独自の活動として始まったかに見える動きには，行政とコンサルの支援があり，またメディアの活用があったのである。玉沖氏は述べている。「飽くまで私の感覚値なのですが，住民の方と一緒にいろいろなことをやり始めると，平均して5カ月目に役割といいますか位置関係が変わってきます。最初は私達リクルートが前面に立って，国頭村の皆さんがリクルートについてきて下さっていましたが，5カ月目で国頭村の皆さんが前を進んで，リクルートが後についていくという具合に立場が入れ代わるのです。最後は皆さんに指示ばかりされておりました(笑)。このようにきちんと皆さんが知ることができて，わかることができれば，住民の皆さんに知恵が培われるのです。その変り目が大体5カ月目と感じております。」

3—3. 国頭村ツーリズム協会の理念

前述の通り，国頭村ツーリズム協会は，エコツーリズムという用語を使わず，国頭ツーリズムという呼称を使ってきた。その提唱者は久高将和氏であろう。

久高氏は，その論文の中で[7]次のように指摘している。米軍の演習地として何とか残ることができた森としてのやんばるの森は，沖縄等におけるエコツーリズムが展開される中核地とされ，近年まさにそれなりの使われ方が散見される。場所によっては過剰利用によって自然環境への負荷やら業者間のいさかいなどといった問題も発生している。SACO(日米特別行動委員会)による安波訓練場返還や普天間代替基地問題などの合意による返還後は，国立公園化を画策した環境省の調査活動の動きもあるが，自然環境保全策や利活用の方策を決めるガイドラインの策定作業も2001年に着手されたばかりである。

「フィールド別の利活用のルールもないまま，天然記念物に指定された植物群落や天然保護区にも指定されている森，国指定天然記念物のマングローブ群が繁茂する河川の利用のみを前面に出して，エコツーリズム推進のうねりだけを一方的に大きくしてしまっているのが現実」と厳しく批判している。「このような行政をあげての動きには，「フィールドの持続的利活用」という視点が欠落しているのは言うまでもないし，エコツーリズムのあるべき姿を正しく理解しないまま事業だけを先行させてしまっている」と指摘する。

久高氏は，エコツーリズムを，「自然環境の持続的保全はもとより，其処に住む生物の安住を保証するものであると共に，エコツーリズムが展開されようとする地域に残された自然に対し，これまで脅威になっていた林業など地域の生業の転換を図りながら，収益の保証をするひとつの策がエコツーリズムである」と理解している。

そこで国頭村ツーリズム協会の8項目の規約が提案されたのである。(資料3)

(資料3)国頭村ツーリズム協会の規約(案)

1. 国頭ツーリズムは，自然環境や地域文化を理解させるため，参加者に十分な直接体験させる事に焦点を当て

たものである。
2．国頭ツーリズムは，自然環境や地域文化を理解するため，様々な分野の体験を修練し，導きだされた事柄を取りまとめ展開されるものである。
3．国頭ツーリズムは，生態系の持続的維持を図ると共に，国頭文化の正確な継承を目的に実践される観光の形態である。
4．国頭ツーリズムは，自然環境の保全や国頭文化の正確な継承に対し積極的な働きかけをするものである。
5．国頭ツーリズムは，地域振興のためより積極的な地域貢献をするものである。
6．国頭ツーリズムは，異文化が地域固有の文化に与える影響に十分な気配りを行い特に地域の古くからの祭祀には特段の配慮をするものである。
7．国頭ツーリズムは，常に訪問者の期待に応えるものであると同時に，公正な経済効果をもたらすことを本分としたものである。
8．国頭ツーリズムは，自然環境の保全や地域文化の継承の重要さを学び，私たちの社会を取り巻く環境の問題の解決に向けて行動する人材を育てる環境教育の要素を含むものである。

3―4．国頭村ツーリズム協会の活動

(1)人材育成講座[8)]

＊　村民を対象に，地域資源(自然・文化・歴史など)を正しく理解しそれらを活かす持続可能なツーリズムの考え方やインタープリテーション(解説活動)技術を身につけることをねらいとした人材育成講座を毎年開講している。

沖縄本島北部，やんばる地域におけるエコツーリズム展開の中枢部とも位置づけることができる国頭村が目指すのは，エコツーリズムの定義に示された「限りある自然資源の保全と持続的活用」である。この理念の上に，国頭村ツーリズム協会では人材育成講座を実施している。その概要は資料4の通りである。

この人材養成講座は，村内に展開するさまざまな業界から参加者を集めて開講しているだけに，当初は価値基準の違いや認識や知識の相違などから言葉を交わすのも遠慮がちであったが，月2回の講座を進めるにつれて異業種間の相互理解が生まれ，垣根を越え共通の指標を持つようになり，違和感のない交わりから協調性が発生し，地域貢献という意識が何よりも高まった感がある，と久高氏は総括している。

このような比較的長期の学びの場の継続が，地域住民の地域理解に対する意識の高揚につながるのである。

具体的に人材養成講座の受講者数は，2000年20名，2001年15名，2002年18名，2003年10名であり，そのうちおおむね8割の人が修了証を受け取る。半年間は長いし，いろいろな職業があるし，月2週に2回ずつ(第2，第4週の金・土)ある。

人材育成講座は，半年あるいは1年間にわたる24回もの一般コースがある。普通，日本各地で行われているインタ

(資料4)　2002年5月15日国頭村ツーリズム協会人材育成講座資料
平成14年度国頭村ツーリズム協会・人材育成講座【一般コース】

国頭村ツーリズム協会の人材育成講座へようこそ。
開講に当たり，主催者と受講者が講座のねらいを十分理解して講座での学びが効果的なものとなるよう努めていきましょう。

1．講座のねらい
＊　地域住民が地域資源を活かす持続可能なツーリズムのあり方，進め方について十分な意見交換を通じて共通認識を持つ。
＊　国頭村の地域資源(自然・文化・歴史など)や素材を正しく理解し，やんばるの特質を再認識することで，持続可能な地域資源の利活用の仕方を学ぶ。
＊　参加者自身の気づきや体験，学びのふりかえりというプロセスの重要性を理解し，コミュニケーションおよびリーダーシップの能力，インタープリテーション(解説活動)技術を身につける。
2．期間
平成14年4月～平成15年3月
3．場所
講義および室内実習：社会福祉協議会・会議室あるいは国頭村森林公園・交流センター
フィールドワーク：国頭村内外
4．参加対象
国頭村地域住民　15名
5．主催・協力
国頭村ツーリズム協会，国頭村役場
6．講座日程と学習内容および進め方
＊　原則として毎月第2金曜・土曜の夜間(午後7時～9時30分)に開講。適時，日曜日にフィールドワークを実施する。日程の詳細は追って通知します。
＊　学習内容
Ⅰ　持続可能な社会の地域資源を活用する地域づくりと

ツーリズム

Ⅱ　やんばるの自然と人，社会，文化とそれらのつながり

Ⅲ　自然保護・保全に関する知識

Ⅳ　インタープリテーション（自然解説）の理論と技術

Ⅴ　安全対策

＊学習の進め方

講座では，ワークショップという，グループでの意見交換や共同作業を行いながら進める参加型学習の手法を多く取り入れて展開していきます。従来よく見られる「教える・教えられる」という型にはまった関係で学ぶのではなく，講座受講者が積極的に他の受講者の意見や発想から学ぶ手法といえます。与えられた課題に対して個人としての意見や考えを持ち寄り，1対1やグループで話し合い，全体で共有し，わかちあうことで次への発展や課題を作り上げるといったプロセスに重点が置かれます。

ープリターの初級認定養成講座などは，長くて1週間の詰め込み型だが，国頭村ツーリズム協会の人材育成講座は長いスパンで，短くて半年，長くて1年間に渡る。季節ごとに見られる植物や生き物が違うので季節をまず知ってもらうのと，季節に対応できる人材をつくる，というのもガイド業の人材育成をしていくのに大切であるからである。

講座のねらいは，

① 地域住民が地域資源を活かす持続可能なツーリズムのあり方，進め方について十分な意見交換を通じて共通認識を持つ。

② 国頭村の地域資源（自然・文化・歴史など）や素材を正しく理解し，やんばるの特質を再認識することで，持続可能な地域資源の利活用の仕方を学ぶ。

③ 参加者自身の気づきや体験，学びのふりかえりというプロセスの重要性を理解し，コミュニケーションおよびリーダーシップの能力，インタープリテーション（解説活動）技術を身につける，ということである。

また，学習の進め方は，講座ではグループでの意見交換や共同作業を行いながら進める参加型学習のワークショップの手法を多く取り入れて展開している。従来よく見られる「教える・教えられる」という型にはまった関係で学ぶのではなく，講座受講者が積極的に他の受講者の意見や発想から学ぶ手法である。与えられた課題に対して個人としての意見や考えを持ち寄り，1対1やグループで話し合い，全体で共有し，わかちあうことで次への発展や課題をつくり上げるといったプロセスに重点が置かれている。

行政官，農家，村議会議員，学校教員，国頭村物産センターの所長も修了生である。だいたい6割から8割の日程に参加した人には課程認定のような形で修了証を出す。ただ，ここで終わりではなくつぎのステップアップ講座を開催していて，修了者たちで作っているグループに入ってもらっている。たとえば自然をフィールドワークしにいくときには一緒に参加してもらって，いろいろなところを，たとえば，国頭村内で問題になっている箇所を一緒に見に行きませんか，という形でインフォメーションを事務局から流して，参加者とともに見に行く。少しずつのスキルアップをねらって，ステップアップ講座にも参加してもらっている。ステップアップ・コースは年7回行う。フィールドワーク等，主にプログラムをつくるとか，ツアーコースを設定するとか，という内容である。コースづくりに関しては，いろいろな情報が必要である。「ここは使えるか」という下見と「ここを使ってみたい」というアイデアが必要であり，とくに安全面についてはステップアップ・コースの重要事項なので，10ある候補のうち9は実際には使い物にならない。

たとえば，ガイドの中には60歳代の人もいれば30歳代，20歳代の若い人もいる。そういった人たちが世代を超えていろいろな意見や文化が違うのを混ぜながら解説していけたらいいなということで，ガイドをしていくし，コースづくりをしていくし，ツアーの内容も一緒に決めている。

また，高校生向けの講座も催している。この講座は辺土名高校に設置されて3年目となる環境科に通う生徒有志の要望によって開講した講座である。やんばるの自然や生き物のこと，地域環境問題のこと，ゴミの問題など，生徒の興味や関心は尽きることがなく，座学と共にフィールドワークも取り入れた体験学習の場となっている。[9)]

その内容は人材育成講座を少し浅めにした内容で，与那覇岳を中心に，一緒に歩いて自分たちで何が見えるのか，フィールドワークをしたり，いろいろなワークショップをしたりしている。

これは環境科の授業ではなく，「フィールドワークがないのでは環境科として機能していないのではないか」という生徒たちからの声が上がって，学校側としても問題がないでしょうということで，土曜日の午前を中心として活動をしている。

子どもたち自身から声が上がってきたからこそ，ツーリズム協会も協力をしている。

最近は野生生物保護センターの方たちと調査活動を一緒にしているはずである。おそらく今やっているのはノグチゲラの調査活動であるだろう。調査活動と聞くとすばらしいと思うだろうが，ものすごく地味な活動である。しかし

長いスパンで調査することで，森の変化や森の様子を知ることができるので，ものすごくいい学びができる。

(2)体験プログラムの提供

＊　国頭村を訪れる旅行者のニーズに応じたガイド(インタープリター)を紹介する。インタープリター(ガイド)とは，全員地元国頭村に住んでいる人で，ほとんどが国頭村ツーリズム協会主催の，地域資源の持続的な利活用の仕方や自然解説技術を学ぶ人材育成講座を修了している。

国頭村は豊かなやんばるの深緑の山々と青い海，そこで生まれた地域固有の風土と生活文化に恵まれた場所である。国頭村ツーリズム協会では，そのような自然と生産と暮らしがつながっているフィールドで，訪問者に本当の豊かさを感じ学ぶ体験をしてもらえるプログラムを地元住民と連携して提供している。

できるだけ自然に負荷を与えない。わざわざ道を開いてツアーコースを開くのではなく，もともと林業が盛んな土地柄だったので，林業で使われていた道を使って，その周辺の植物や生き物を地元の人が，人材育成講座で育ったガイドとして案内していくという形をとっている。地元のガイドは，引退をしていて，時間があるので参加してもらうとか，林業関係で，時間が空くときにインタープリターとして入ってもらう。

また，区の文化・祭りをみるときは，中から見るのではなく外から見るようにしている。外から来た人が祭りに参加することで祭り自体が壊れることが怖いから，祭りが行われている場面では，まずは外側からだけ，どういう形で祭りが行われていくかだけを見る。たまに，いろいろな人がいて参加してみたいという人がいるが，ここの祭りはここで行う，ここのもので，他からの影響を入れないという形をとる。

(3)学校教育との連携

＊　国頭村の海・山・川をフィールドに一般グループを始めとして，県内外の学校教育旅行や児童館，子ども会，小中学生向けの環境学習・環境教育プログラムを提供している。

＊　地元の子どもたちが地域をより深く理解できるよう，国頭村内の小中学校の「総合的な学習の時間」に学校と協働して取り組んでいる。

＊　やんばる三村(国頭・大宜味・東)の親子向けの自然観察会を毎月開いている。

村内の学校にはいろいろな呼びかけをしていて，「総合的な学習の時間」の手伝いをしている。まず，地域の子どもたちに地域を知ってもらう学びをしてもらおう。同時に保護者にも声がけをして，地域の人にも関わってもらって，「どういったことをこれから子どもたちが学んでいったらいいんだろうか」ということをテーマとして共に学び考えている。

たとえば，この間「山・川・海」というテーマを設定した。国頭村ではそういったものがすぐ近くにある。学校の近くの，山・川・海を使ってそれらがどういう形でつながっているのかを学ばせることもできるし，また，川だけをテーマにして，すこしずつ学年によって理解度が違うので，楽しんで学ばせるものにしたり，考えるものにしたりする。おもしろい子どもたちがいて，川を中心にどういったものが見えるかと聞いたら「川は家がたくさんあるところほど汚れている。家が少なくなるにつれて，川はきれいになる」ことを発見した。なぜそうなるかというと，「排水口がなくなっていくと川はきれいになっていく」という。実際に数えさせると確かにそうである。生活排水が流れ込むことが少なくなればなるほど川はきれいになっていくということを発見した子がいる。スタッフも，ああなるほどなとそこから学ぶことができるし，スタッフはあえて口出しをしないで子どもたちに見つけさせる，手伝いをするだけである。

また，年配の人たちが入ることで，昔はこんな遊びをしていたんだということを学ぶこともできる。今の世代は30～40歳代の世代の親の子どもたちである。親がまず遊びを知らない。そこに60歳代の人が入ることで，「昔はこういう遊びをしていた，昔はこの川ではこんな魚がたくさん採れたよ」と言うと，「それではそういう川にまたして泳いでみたい」という意見を言う子がいたり「この遊びは面白いから，友だちにも教えたいからもう少し詳しく教えて欲しい」と言ってきたりする。そこのところが面白い。

学校の先生方も自分たちは，たとえば名護あたりから来ている方も多いのだが，「学校の近くにこれだけ学べる素材があることを知りました」という先生も多くいた。

昔の先生方は地域の中に入っていっていたが，今の先生方は地域に入る機会も少ないし，学校のカリキュラムの関係上，土曜日が休みになって詰め込みがきつくなっているので地域と関わりを持つ時間が取れなくて，それで地域との関わりがだんだん薄くなっていったという現状がある。それではまずい，というので，「地域の子どもたちを預かっているのだから地域のことを先生方がまず知らなければいけない」と考える。このように，総合的な学習の時間をする前に，事前に先生方との打ち合わせをして，先生方に一度歩いてみてもらうということをしている。

教師の側は忙しいからと言ってことわることはない。今まで関わってきた先生方は，「子どもたちがこういう意見を言ってきたのは驚きもあるし，やってよかったな」という感想がほとんどであった。学校の先生方は，上の方から「総合的な学習の時間」「生きる力の育成」といったテーマをさせてくださいという通知がきていても，1年間の準備期間があったにせよ何をしていいかわからないままにここに至ってしまった先生が多い。そこで先生方が企画していたのは，いろいろな工場の見学だったらしい。とかく若い先生に上の先生から「やってください」と押しつけをされることが多かったという。

本来の総合的な学習の時間のねらいは，地域のいろいろな世代の人たちが関わってくることで，文化のこともわかってくることにある。たとえば三味線がうまい人から習うなどのきっかけづくりができたらいいと常に考えている。地域の素材，人の素材ということがテーマになってくるであろう。たとえば，祭りに関わっている人が総合的な学習の時間に関わってくると，子どもたちも学べるし，子どもたち以上に大人が学べるだろう。

(4)過去3ヶ年の主な実績

●自然環境保全事業

① 国頭村より北部地域産業振興事業を受託し，環境保全地区と有効資源活用地区の資源調査として，国頭村森林公園周辺の自然環境調査(鳥，哺乳類調査・植生調査・昆虫，両生，爬虫類調査)を実施した。

② 国頭村より対米請求権地域振興助成事業を受託し，村内に所在する比地大滝，与那覇岳および奥集落の地域資源調査を実施し，活用プログラムを作成している。

国頭村ツーリズム協会の立ち上げ当初は，村からの補助で資金提供してもらった。現在は，村の事業を委託される形で協会の資金を得ている。村の事業として委託された内容は，村内での農業体験プログラムとか，村が整備するであろうトレッキングコースのコース策定の調査を今している。その委託事業と，ガイド業については協会が受付をしている形で事務費の20%を受け取るようにしている。

●環境教育・環境学習事業

環境教育・環境学習事業として，村内外の小中学校および高等学校の「総合的な学習の時間」の指導や村外の子ども会における環境学習指導を行う。実施校および団体としては，辺土名小学校，国頭中学校，辺土名高等学校，石川市子ども会ほか。

●人づくり事業

人づくり事業としては，国頭村より特定農山村活動事業を受託し，平成14年度人材育成講座一般コース(全50回)とステップアップ・コース(全7回)を実施した。

●地域振興事業

①国頭村より対米請求権地域振興助成事業を受託し，国頭村を紹介するためのツアーガイドブックを作成した。

②沖縄県観光リゾート局「体験滞在型観光強化キャンペーン事業」の一環として，平成14年3月14日～29日の期間，県外からの観光客誘致による経済波及効果と住民参加型の地域の活性化を目的とした「第1回国頭村かかしまつり」を国頭村奥間ターブック周辺にて実施した。

●修学旅行，各種団体旅行，個人旅行の受け入れ

県内外の修学旅行(35件)，各種団体旅行(20件)，個人旅行(215件)を受け入れた。隣の東村は施設を多く作る形で修学旅行の受け入れを多く進めている。東村ではマングローブの周辺でのカヌー体験が有名である。国頭でも少しずつ進めていこうとしているが，そこまでたくさん人を入れ込める容量がない。とりあえず今年から修学旅行も受け入れる形で動いていこうとはしている。修学旅行も学びを意識したプログラムづくりをしている。

また，国頭村ツーリズム協会では，近くに野生生物保護センターがあるのでそこを活用し，レンジャーに協力してもらって，いま国頭で問題になっている自然保護の問題を30分から40分ぐらいでスライドを使った形で講演してもらっている。

4. 環境省やんばる野生生物保護センターの働き[10)]

国頭村には環境省やんばる野生生物保護センターがあるが，このセンターの機能として，野生生物の研究と保護増殖事業とともに普及啓発活動がある。

とくに北部の三村(国頭，大宜味，東)の小中学校などからの要請に対してはできるだけていねいに指導協力をしている。小中学校の総合的な学習の時間の実践について協力をすること，4人のレンジャー(自然保護官)がそれぞれの専門領域について子どもたちに詳しく教えたりすることがある。

あるいは，センターでは対応しきれない場合には他の情報や機関を紹介したりする場合もある。たとえば，生徒から水草について知りたいという電話が入ったことがあるが，4人のスタッフには水生植物の専門家がいない。そこで研究資料の所在を探して閲覧ができるように手配をしたり，他の機関に専門家がいるのを見つけて学校とつなぎ，とうとうその専門家が学校まで来て生徒と水生植物の調査をするまでになった例もある。このようなつなぎ役を果たすこともある。

ただし，準僻地，僻地の指定を受けた国頭村に赴任する教員は3年間の任期の中で必ずしも地元の生活や自然に関心や理解が深まらない。しかし，教員の意識や態度が児童・生徒の自然に対する関心の持ち方に大きく影響するので，教員の啓発も重要である。

また，辺土名高校の環境科に対しては設立以来何度かアプローチを繰り返して無償で授業をすることなどを琉球大学の教員と共に提案してきたが，近年になって授業の一環として自然保護官が年に4回授業を行ったり，教員に対する研修を実施したり，あるいは辺土名高校を会場にしてシンポジウムを開催したりと，交流が活発になってきている。

この他にも，自然観察会など，親子を対象とした事業を数多く行っている。しかし，国頭村の子どもは，すごく行事が多い。子どもの数が少ないにもかかわらず行事の数が多くて何かあったらすぐに「○×大会」の代表に選ばれる。自分が出たくなくても隠れることができない。逃げ場がなく，年間を通して何回か代表として出ざるを得ない。積極的な子どもにとってはすごくいいことも，消極的な子，興味のない子どもにとっては非常にしんどいことになる。本当はセンターとしてもいろいろなことを仕掛けたい思いもあるのだけれど，たとえば，絵画展とか催してヤンバルクイナのポスターの募集とか展示会とかすることもできるが，子どもたちはほかにも何かの大会とかコンクールとかで使われていたりするので，そういう展示会を催すのが本当にいいのかどうかを検討している。本当に興味を持って描いてくれればいい，興味を持つ子どもがそれで増えればいいのだが，どういう仕方ですればいいかを来年度以降探らなければならない。いずれにしても，子どもたちの負担にならないようにしていかなければならず，ただ大人の側が仕掛ければいいというものではない。

5. おわりに

以上，国頭村ツーリズム協会の人材育成講座を中心に，国頭村における人づくりとまちづくりの現状を，概観してきた。比較的長期の学びの場の継続が，地域住民の地域理解に対する意識の高揚につながるとともに，観光と自然保護と村民の生活の保障という一見相矛盾する3つの内容を，エコツーリズムとはまた異なった独自の国頭村民の自助努力によった発想で課題解決していこうとする取り組みは，小さいながらも卓抜したものであると考える。とくに人材育成講座を中心とした生涯学習の講座が官製ものではなく，「国頭やんばる塾」という有志の学習会から立ち上がっていって，国頭村ツーリズムの8つの理念に練り上げられ，継続的な組織としてさまざまな職種の人々を巻き込みながら，村の将来を展望した事業にまで展開していることは大変すばらしいことである。

自然保護については，周辺住民や子どもたちの理解を深め，とくに地域住民の理解がないとその地域の自然を保護することにならない。これまでの自然保護は，都市部に自然保護団体があって，ある地域で開発があるときに頭ごなしに反対を唱える場合があった。それは結局開発か保護かの対立になるケースが多くなる。ある地域で開発がある場合に，それを回避する方策はないのか，とか，こういうふうにすればいいですよ，とかいった交渉をうまく野生生物保護センターがサポートするほうがいいわけだが，そのためには，この地域の人が自分たちの地域の自然についてまず知るということが大事だし，それを知ってそれをどういうふうにしていくかということが，まず地元から起こらなければいけない。それには，大人に対しても，子どもに対しても今自分が住んでいるところがどういうところかをうまく伝え，どういう問題が起こっていますよと伝えることが必要となる。そのような役割を果たしているのが，まさに国頭村ツーリズム協会人材育成講座なのである。

しかし，やんばるに住む人間ではないながらも，今後の課題について若干の点を指摘しておきたい。

たとえば，一言で地元といっても，集落で地元，区，村，県北部地域で地元と，人それぞれで見方が変わる。細かい見方をすれば「あいつはウチの地元でない」という言い方をするのが，実は隣の区のことであったりする。「地元のためになっていない」というのもどのレベルで見ているかによって変わってくる。

また，エコツーリズムを標榜する業者は数多くある。ある地域とある業者との間にうまく話がいっていても，もっと大きな地域で見ている業者からは「あいつらは変だ」という見方をする場合もあるし，企業の利害が絡んでくると調整がむずかしい。沖縄県のほうで今エコツーリズム関係のもので保全利用協定のワーキング会議が開かれている。県の活動についても，県からあるエコツーリズム関係の業者に委託している（他を排除したのではなくプロポーザル方式で業者を選定した）が，よその事業者からすれば，特定の事業者にすべての情報が集中しているという見方をする人もいる。

同じ国頭村内でも，東部と西部では関わる業者が異なるなど，業者間の調整と合意の形成や，業者と地元の人たちとの了解の関係づくりなど，さまざまな調整問題が関わってくるであろう。

その背景にあるのは，近代化の終焉と生態系の保全に向

けて社会構造を大きく転換させるという構造的な必要である。久高氏が指摘するように，一方で都市生活などから逃れ，原風景を探求する人々のニーズが増加し，他方でその要求を満たすことで自然が残された地域の収益を保証し，なおかつ自然環境の保全にもつなげようという2つの理想を同時に満たそうとする低コストな収益システムを，自然環境の問題を修復するひとつの手段として考え出しているのである。

オーストラリア・エコツーリズム協会においては，「エコツーリズムとは，自然環境や地域文化への理解を深め，自然環境保全の精神を育むことで，自然生態系の持続的活用を図る観光形態である」と定義している。エコツーリズムとは，貴重な自然が残されたある特定の地域で，自然に対する負荷を極力無くし，ありのままの自然，ならびに人の営みをそのまま活かし，それらを壊すことなく展開し，そこに生活基盤を置く人々の生活を保障する収益までを得ようとする観光のあり方である。

その意味で，エコツーリズムの理念を実現するために，上に挙げた調整問題の解決より以上に重要なのは，地元住民から重層的で専門的なガイドとツアーコーディネーターを養成していくことであろう。そのためには，国頭村ツーリズム協会が取り組んでいる人材養成講座が，市民大学のような形態をとってさらに広域的な広がりをもち，また，地元の大学との連携などによって公的な資格認定カリキュラムと結びつくことが望ましいのではないだろうか。

「ツーリズムは，町おこし」とは，先に挙げた玉沖氏のことばであるが，そのとおりであろう。ツーリズムについては本稿では十分に取り上げてこなかったが，これからの日本の農山漁村のみならず都市も含めてまちづくりの課題となると考える。国頭村の今後の展開とともにさらに注目していきたい。

注

1）古市勝也2003年「地域の学習資源の発掘・見直しの背景と活用方策」『社会教育』2003年11月号

2）たとえば富川盛武2002年「エコツーリズムの地域へのインパクト—西表島の事例—」エコツーリズム国際大会・沖縄2002.11.28事例報告『エコツーリズムによる経済効果』http://www.ecotourism.gr.jp/　2004/02/24

3）資料1：日本エコツーリズム協会ホームページ　http://www.ecotourism.gr.jp/　2004/03/10
資料2：西表島エコツーリズム協会ホームページ　http://www10.ocn.ne.jp/~iea/index.htm　2004/03/10

4）沖縄県国頭村村勢要覧2001年，国頭村ツーリズム協会，2002年『国頭村まるごと体験ツアーガイドブック』

5）沖縄県国頭村村勢要覧2001年，沖縄県庁ホームページ統計情報　http://www.pref.okinawa.jp/index-j.html　2004/02/24

6）財団法人沖縄協会ホームページ　http://homepage3.nifty.com/okinawakyoukai/index.htm　2004/02/24

7）久高将和，2002年，（財）沖縄協会『季刊沖縄』第22号，pp.45-47

8）国頭村ツーリズム協会人材育成講座資料，2002年5月10日

9）大島順子，人材育成講座報告②　国頭村ツーリズム協会ホームページ「山原の森通信」2002～2003年　http://www8.ocn.ne.jp/%7Ekunitabi/index/yannbaru/yannbarunomori_06.htm 2004/02/24

10）澤志泰正，やんばる野生生物保護センター　http://www.okikosai.or.jp/kenkyusho/magazine/sima_25/sima25-17.pdf 2004/02/24

参考文献

岡本伸之編，2001年『観光学入門　—ポスト・マス・ツーリズムの観光学—』有斐閣

小林寛子，2002年『エコツーリズムってなに？　—フレーザー島からはじまった挑戦—』河出書房新社

久高将和（写真），日本野鳥の会やんばる支部編，1994年『やんばるの森　—輝く沖縄のいきものたち—』東洋館

（本研究は，平成15年度学術フロンティア推進事業の一部として実施したものである）